エッセイ

安芸武田家の遺跡を訪ねて

高野　賢彦

武田本家の五代信光以来、武田は甲斐守護職のほか安芸守護職を兼帯していた。文永十一年（一二七四）十月蒙古襲来があり、鎌倉幕府の執権北条時宗は七代目の武田信時に対して、「西国に所領を有する者」として直ちに西国へ赴いて防衛に当たるようにと命じた。信時は甲斐の有力家臣板垣、甘利、岩崎ら数千を引き連れて敵退散の鐘と読経がひびき渡る中を安芸へ道を急いだ。また七年後の弘安四年（一二八一）五月には蒙古の第二次襲来があった。そしてさらに第三次襲来が予想されたので信時は帰国することができず、やむをえず安芸の武田山の麓に定住することになった。

信時の跡は八代時綱、九代信宗、十代信武とつづき、信武は後醍醐天皇に反した足利尊氏に従って南北朝時代を戦い抜き、次男信成（のぶしげ）らを引き連れてしばしば関東まで転戦した。そのとき子らを安芸と甲斐に振り分けた。すなわち長子氏信が安芸守護職を継ぎ、次子信成が甲斐守護職を継ぐことになった。一方、安芸では長子氏信の跡は信在、信守、信繁とつづき、子沢山の信繁の子のうち信栄（のぶひで）、信賢（のぶかた）、国信の三人は六代目の将軍義教（よしのり）の謀略によって奈良の越智維通（おちこれみち）を討伐するため斑鳩（いかるが）の里に陣を張っていたが、そのときさらなる謀略命令を受けた。それは同僚の大名一色（いっしき）義貫（よしつら）を殺害することであり、朝食を差し上げたいといって義貫を招きよせた。しかし何が起こるか分からない時代、敵もさる者、合戦となって信栄が重傷を負った。しかし、この功によって信栄は義貫の領国若狭を拝領し、以後武田が順次若狭の守護職を拝領した。そして末弟の元綱（もとつな）は安芸に残って分家の安芸武田家を興した。

すなわち武田は常陸（ひたちなか市）で起こって甲斐へ流罪となり、蒙古襲来時に甲斐から安芸へ移り住み、さらに室町時代に若狭を拝領した。そのため武田の本家は若狭武田家ということになる。

ところで広島市の安佐南区には武田の城砦として四百十・九メートルながら急峻の武田山がある。武田山は甲斐にも若狭にも存在しないが、広島では市民のトレッキングコースとなっている。私は「プロジェクト武田山」という団体から「武田家」についての講演を頼まれた縁で何回か広島を訪れた。その折、七転八倒しながら武田山に登り、鎌倉時代から室町時代にかけて三百年の歴史が刻まれた壮大な山城であることを知った。そして吉田篤三氏の案内で山麓に点在する数々の遺跡や神社仏閣を巡ることができた。

光賢寺　武田山北麓に位置する武田信宗の菩提所の跡地。恵心僧都の高弟恵空が阿弥陀寺を建てたのが始まり。今は傾斜地の草原であるが、武田山を二百メートルほど登ってこの地に立つことができた感動は生涯忘れることができないであろう。

正伝寺　相田四丁目にある。開山は恵空。武田家の祈願所になり、のちに現在地へ移って寺名を変更。浄土教の寺。

田中山神社　安東六丁目にある。武田信宗が正安元年（千二百九十九）に武田山に築城のとき鬼門を除くために勧請した立派な神社。

光明寺　高取北一丁目にある。武田信光が鬼門鎮護の道場として尊崇。元は真言宗だったが、今は真宗寺院。

長楽寺観音堂　長楽寺三丁目にある。武田家や毛利家の祈願所として繁栄。真言宗の霊場。江戸時代の福島正則に寺領を没収されて衰退して廃寺になるも観音堂が残っている。

毘沙門堂　緑井町にある。武田信宗が北方を守護するために建立か。武田滅亡とともに荒廃、その後何度か再建され、現在のような壮大な建物となる。

新羅神社　祇園五丁目にある。武田信宗が甲斐から勧請したという。源新羅三郎義光を祭る武田家の守護神。この神社は南部三郎光行が甲斐の南部町に造り、また鎌倉時代に移住した青森県八戸市にも存在するが、甲府市に存在しない。

安神社　祇園二丁目にある。元の名は祇園社。武田と対立していた厳島神主家に焼打ちされ、武田時綱が現在地に移設して建立したと伝えられる。

熊岡神社　祇園五丁目にある。武田元繁が鎌倉の鶴岡八幡宮を武田山の守護神として勧請したという。

浄喜寺、大年神社　祇園四丁目にある。この二つの寺と社は同一境内に存在。武田の出城と米蔵があったという。

武田一族の墓　山本九丁目にある。安芸武田氏の最後の当主武田光和の墓があったというが、いまは山坂の荒れ果てた基城に竹藪が迫っている。武田光和の五輪塔は昭和三十年に周防武田家の武田甲斐人氏によって岩国市玖珂（くが）町の周防武田家の屋敷跡へ移され、同所にはまた武田信宗の供養塔も金山城下から移されている。なお一説に広島市の不動院の裏山にある巨大の五輪塔が武田光和の墓といわれている。

立専寺　山本九丁目にある。元は武将山金龍院と言われ、武田家の祈願所。武田家滅亡とともに廃寺となり改名。

仏護寺　中区寺町にある。甲斐の原田政信が安芸へ招かれて武田山の東麓に天台宗の寺を創建。二世円誓（甲斐の武田信守の子という）が本願寺の蓮如に帰依して改宗。円誓は安芸武田家の分家である伴与一郎の娘を娶ったという。この寺の本堂は大きく、いまは本願寺派の広島別院。

不動院　牛田新町にある。安芸の安国寺か、それとも利生塔の地か。武田家との関係が深いらしく武田刑部少輔の大きな五輪塔があり、一説に武田光和の墓地といわれている。また武田一族の安国寺恵瓊（えけい）の墓もある。

福王寺　安佐北区福王寺山にある。安芸の高野山と言われる真言宗の壮大な山岳寺院であり、タクシーは途中までしか行かない。武田信武の嫡子氏信のものと伝えられている大きな供養塔が現存。また後に若狭の武田信賢が同寺に安芸の聖道門別当の地位を安堵している。住職に面会することができたのは感激。三本の燈明杉が天を衝く。なお住職が案内してくれた古墓は武田氏信のものか。

その後、私は過去の広島訪問で果たせなかった「武田一族の霊碑と安芸源氏・武田一族終焉の地」という二つの新しい供養地を訪れた。そして武田家老の白井氏、香川氏、熊谷氏の城山を遠望し、さらに武田元繁が毛利元就に弓で射られて落馬し、安芸武田滅亡の因になった有田合戦の現地を訪ねた。川淵に碑が建てられていた。

武田一族の霊碑　安佐南区高取南一丁目にある。碑は地元の墓園内にあり、そばに幾つかの無縁墓が集められていた。碑の側面に「昭和三十九年九月　武田家一家老品川家、品川源助三男　お多福酢株式会社社長佐々木清一建之」とあった。

また次の文が墓石の裏に刻まれていた。「天文十年五月十三日武田城落城に臨んで城主武田光和公は苟も大和武士として、主たるものを騙し討ちとは卑劣至極と、その不信を憤慨し悲憤の中に自刃し玉えりという。蓋し興亡常なき戦国武将の宿命と謂うべきか、茲に懺悔しつつ幾多の無縁塚を供養して一族郎党の菩提を弔うことを通じて全世界の恒久平和を衷心より祈願するものである。末裔　佐々木清一誌」

安芸源氏・武田一族終焉の地　安佐南区長楽寺三丁目の高台の墓城にあり、墓石の裏に次の文が刻まれている。「今を去ること四百有余年の昔　天文十年三月十三日新羅三郎義光が末裔　安芸の国守護武田信重はおしよせる大内・毛利の大軍に祖父の地を死守せんと奮戦せしも衆寡敵せず金山城にて一族諸共に自刃す。残りし血族は悉く捕われ、六親等に至るまで女人幼子の区別なくこの地冷たき石積みの上にあわれ無情の刃にかかりてはて封印される。時は流れ、辛くも難をのがれその血を今に伝えし者は真を積みて悲願結集し、尊き仏法の功徳力をもて縛をとかる。今はただ苦もなく怨もなく一族ともに仏国浄土に赴かん。願くばその説く所怒親平等の大慈大悲　戦乱に倒れし遍くの諸霊の上に注がれんことを。

諸行無常、是世滅法、生滅滅

熊岡神社　祇園五丁目にある。武田元繁が鎌倉の鶴岡八幡宮を武田山の守護神として勧請したという。

浄喜寺、大年神社　祇園四丁目にある。この二つの寺と社は同一境内に存在。武田の出城と米蔵があったという。

武田一族の墓　山本九丁目にある。安芸武田氏の最後の当主武田光和の墓があったというが、いまは山坂の荒れ果てた基城に竹藪が迫っている。武田光和の五輪塔は昭和三十年に周防武田家の武田甲斐人氏によって岩国市玖珂（くが）町の周防武田家の屋敷跡へ移され，同所にはまた武田信宗の供養塔も金山城下から移されている。なお一説に広島市の不動院の裏山にある巨大の五輪塔が武田光和の墓といわれている。

立専寺　山本九丁目にある。元は武将山金龍院と言われ、武田家の祈願所。武田家滅亡とともに廃寺となり改名。

仏護寺　中区寺町にある。甲斐の原田政信が安芸へ招かれて武田山の東麓に天台宗の寺を創建。二世円誓（甲斐の武田信守の子という）が本願寺の蓮如に帰依して改宗。円誓は安芸武田家の分家である伴与一郎の娘を娶ったという。この寺の本堂は大きく、いまは本願寺派の広島別院。

不動院　牛田新町にある。安芸の安国寺か、それとも利生塔の地か。武田家との関係が深いらしく武田刑部少輔の大きな五輪塔があり、一説に武田光和の墓地といわれている。また武田一族の安国寺恵瓊（えけい）の墓もある。

福王寺　安佐北区福王寺山にある。安芸の高野山と言われる真言宗の壮大な山岳寺院であり、タクシーは途中までしか行かない。武田信武の嫡子氏信のものと伝えられている大きな供養塔が現存。また後に若狭の武田信賢が同寺に安芸の聖道門別当の地位を安堵している。住職に面会することができたのは感激。三本の燈明杉が天を衝く。なお住職が案内してくれた古墓は武田氏信のものか。

その後、私は過去の広島訪問で果たせなかった「武田一族の霊碑と安芸源氏・武田一族終焉の地」という二つの新しい供養地を訪れた。そして武田家老の白井氏、香川氏、熊谷氏の城山を遠望し、さらに武田元繁が毛利元就に弓で射られて落馬し、安芸武田滅亡の因になった有田合戦の現地を訪ねた。川淵に碑が建てられていた。

武田一族の霊碑　安佐南区高取南一丁目にある。碑は地元の墓園内にあり、そばに幾つかの無縁墓が集められていた。碑の側面に「昭和三十九年九月　武田家一家老品川家、品川源助三男　お多福酢株式会社社長佐々木清一建之」とあった。

また次の文が墓石の裏に刻まれていた。「天文十年五月十三日武田城落城に臨んで城主武田光和公は苟も大和武士として、主たるものを騙し討ちとは卑劣至極と、その不信を憤慨し悲憤の中に自刃し玉えりという。蓋し興亡常なき戦国武将の宿命と謂うべきか、茲に懺悔しつつ幾多の無縁塚を供養して一族郎党の菩提を弔うことを通じて全世界の恒久平和を衷心より祈願するものである。末裔　佐々木清一誌」

安芸源氏・武田一族終焉の地　安佐南区長楽寺三丁目の高台の墓城にあり、墓石の裏に次の文が刻まれている。「今を去ること四百有余年の昔　天文十年三月十三日新羅三郎義光が末裔　安芸の国守護武田信重はおしよせる大内・毛利の大軍に祖父の地を死守せんと奮戦せしも衆寡敵せず金山城にて一族諸共に自刃す。残りし血族は悉く捕われ、六親等に至るまで女人幼子の区別なくこの地冷たき石積みの上にて封印される。時は流れ、辛くも難をのがれその血を今に伝えし者は真を積みて悲願結集し、尊き仏法の功徳力をもて縛をとかる。今はただ苦もなく怨もなく一族ともに仏国浄土に赴かん。願くばその説く所怒親平等の大慈大悲　戦乱に倒れし遍くの諸霊の上に注がれんことを。

諸行無常、是世滅法、生滅滅

己、寂滅為楽。
武田信重が裔　浅水信一
浅水重子　薄井祐子　古川
牧絵
武田源三が裔　村岡幸雄
　平成十年四月建之」

なお、碑の左にある立札には次のように書かれている。

「武田家の居城であった銀山城は天文十年（千五百四十一）に毛利軍によって攻め滅ぼされました。武田軍はよく防戦に努めましたが予期しない搦め手からの猛攻に耐えきれず、一族は敗走の道を落ち延びてゆく結果になり、銀山城はあえなく落城してしまいました。それでも戦える者は戦い、傷ついた者は物影にひそみ、再起をかけましたが厳しい追跡にあい、武士はもとより子女まで捕えられ、ことごとく処刑されてしまいました。その多くがこの場所で処刑され、隠密に処理されたと伝えられていますが、まさしく武田一族終焉の地といえます。この場所には五輪の墓石や江戸時代の各年号を刻んだ墓石が数多く祭られています。この因果な場所に武田家血族の人やゆかりの人達によって平成十年（千九百九十八）に鎮魂碑が建立されました。
　平成二十二年（二〇一〇）
　四月　安郷土史懇話会」

この二つの供養碑では武田山金山城（今日一般には銀山城）が落城した日と自刃した城主の名が異なっている。守る武田と攻める大内・毛利の間に和談が成立したと言われているが、近くの伴城に集められた武田の家人が討たれたのは天文十年五月十二日夜から十三日にかけてと言われている。また金山城の最後の城主についても混乱がある。武田光和は天文九年六月九日に病死し、男子がなかった。河村昭一氏はその著『安芸武田氏』において若狭羽賀寺の古文書によって光和の跡目は同盟していた尼子経久の要請により、若狭守護武田元光の子信実（信豊の弟）が継いだと説いている。

ところが天文九年九月に尼子と毛利の戦があった。尼子経久の孫晴久が大軍を率いて毛利元就の郡山城下へ攻め込んだが、大内義隆が元就援兵として陶隆房の一万を派遣したこともあり翌十年一月十三日に相合（あいおう。安芸高田市）の宮崎長尾の合戦で敗退して風越山を越えて逃亡した。すると光和の跡目となって間もない信実は尼子氏の援将牛尾幸清とともに金山城を抜け出し、大雪の中を出雲へ逃亡したという。

「武田一族の霊碑」に書かれているように品川信定はたしかに武田光和の家老の一人であり、堤田英雄氏の『武田氏系譜と戦歴』によれば、光和の祖父元綱の女婿である。また「武田一族終焉地に立つ碑」では武田信重が自刃したと書かれているが、信重とは伴城の城主繁清の子、一説に光広（光和の甥）のことであろうか。信重は一説に城内で自害したと言われ、また一説には戦死したとも言われている。

いずれにしても金山城落城時は大混乱していたので不明なことが多い。武田一族の最期の城兵が金山城から伴城へ移るなど、落ち延びようとしているきに毛利勢に捕えられたのではなかろうか。二つの供養碑がいずれも伴城に近い武田山の北側、すなわち搦め手に建てられているのはそのためであろう。

白井氏の黄金山城

この城は南区黄金山緑地にあり、山頂にテレビ塔が立てられている。元関東御家人の白井氏は現代の千葉県白井市の出自であり、やや遅れて安芸の国へやってきて武田に仕えた。黄金山城を拠点として仁保島とその一帯を支配して水軍を有し、本家分家ともども大内氏の水軍と猛烈な合戦を繰り返して武田の金山城を支えた。

八木城と高松城　武田から離反。

毛利元就の郡山城は武田の金山城の北東方向にある。従ってこれを防御するため香川行景の八木城と熊谷元直の高松城は郡山城に向かって備えており、出雲街道や太田川などに沿って一直線に並んでいる。両氏が元就に籠絡されれば武田は当然危うくなる。なお香川氏の祖はもともと現代の神奈川県茅ケ崎の出であり、承久の変（一二二一）の功によって八木村の地頭になった。

香川行景の後である光景は武田の最終段階で光和の側室の子小三郎（周防武田家の祖）の存在を知り、光和の跡目になっている光広

（信実）は人望がなく将器に乏しいから小三郎を城主に迎えたいと思い、そのことを毛利元就に相談して承諾を得たと言う。しかし武田の有力家老が敵である元就の承諾を得たとはどういうことであろうか。あるいは元就の手が密かに光景に回り、元就に通じていたのかも知れない。

　次に熊谷氏も元は関東御家人であり、やはり承久の乱の功によって安佐北区三入（みいり）の地頭職を賜わった。源平の一の谷の合戦で平敦盛を討った熊谷直実の子孫と言われている。安佐北区可部を流れている太田川支流の根の谷川の左岸にある高松山が居城であった。

　熊谷元直の跡目は信直であり、南北朝時代から武田のもとで有力家老として仕かえ、武田光和と水魚の交わりをしていたという。そのため光和の側室として妹を嫁がせていたが、光和との関係が思わしくなく、出戻りしたことが信直と光和の関係が悪化した原因であろうか。しかし信直の高松山は毛利元就への備えであったので元就はなんとかして信直を籠絡したいと思っていたに違いない。毛利家は風見鶏のように武田、尼子、大内など、その時々の強者に従っていたが、大内義興へ寝返ったとき恩賞として可部の広大の領地を貰い受けた。

　元就はその領地を熊谷直実籠絡の手段に使うことにし、代償として武田光和からの離反を求めた。信直がこれに応ずると、光和が怒って攻め込んできた。しかし信直はもともと家老であったので光和の将兵の意気が上がらず、光和は再度攻めようとしたが元就が高松山の後詰をする動きを示したことから、ついに断念せざるを得なかった。信直の離反は天文二年のことと思われるが、有力家老の離反は武田に決定的な打撃を与えた。

　武田の家老衆には品川信定、香川行景、熊谷元直、己斐（こい）直道（宗瑞）、粟屋氏、伴繁清、白井氏など大勢いた。伴氏は武田の分家であり、家老衆の多くが武田と姻戚関係にあったと思われる。そのなかでも熊谷元直が毛利元就との有田合戦で最初に戦死し、強硬派の香川、己斐両氏は武田元繁を討ち取って油断している元就を討つため出陣して返り討ちにあったと言われている。思うに鎌倉時代の昔から武田は武辺者として戦力はあったが、武田信玄を例外として謀略を仕掛けることが不得手であったように思われる。　以上

エッセイ

名物「秋田了戒」

原　靖雄

　江戸時代の中期、八代将軍吉宗が刀剣鑑定家の本阿弥に命じて『名物牒』（享保名物帳）なるものを作らせた。これは将軍家および各大名家に伝わる由緒ある刀剣の優品を選び、記したものである。選ばれた総数は約一七〇口であり、そのうち現存するもの約一〇〇口である。現存するものの大部分は国宝または重要文化財に指定されている。

　名物には由緒となる名前がつけられていることが条件になっているが、その多くは持ち主をつけたものとなっている。例えば、五郎入道正宗作で石田三成所持の「石田切込正宗」（重要文化財）などがある。その他では、身幅が広く菜切り庖丁に形状が似ているところからつけられた「庖丁正宗」（国宝）などもある。

　短刀で「秋田了戒」（重要文化財）という名物がある。山城鍛冶・了戒の作で秋田城之介が所持していたのでその名がついた。享保の頃は加賀の前田家にあったが、現在は個人の蔵品となっている。その作品は「鵜の首造り」という異風な造り込みで、つまり、手元が刀で先が剣のような出来で、遠くからでも一目で見分けがつきやすい。その秋田了戒とそっくりなものを展示即売会で見つけた。

　昭和四十一年十一月、銀座松坂屋で即売会があるので覗きに行った。刀剣の勉強をはじめてまだ四、五年しか経っていなかったので、とても現物を買うところまで達していなかった。仲間うちの集まりがあったときなど、

　「刀を買うときには、先輩の目利きに一緒についていって貰いな」とよく言われていた。会場には五十振ほども並んでいただろうか。その中には重要文化財の「後藤正宗」が千五百万円で中央に飾ってある。順繰りに見ていくうち、会場の一番奥まったところに、それ